

東山御文庫蔵『百人一首詠歌大概未来記三種口伝』翻刻

—近世天皇家における百人一首注釈の研究のために—

酒井茂幸\*

はじめに

本稿で翻刻した東山御文庫蔵『百人一首詠歌大概未来記三種口伝』（勅封六八—七—四—一三）は、拙著『禁裏本歌書の蔵書史的研究』（思文閣出版、二〇〇九）において後西天皇宸翰と認定し、万治二年（一六五九）六月四日の後水尾院から後西天皇への三部抄伝授の具体的内容を示すと推定した書である。書誌的事項や先行注との関係などについては同書を参照されたい。

そもそも、「三部抄」と称される『百人一首』・『詠歌之大概』・『未来記雨中吟』の禁裏における講釈は、正親町天皇期までは三条西家当主が行っていたが、後陽成天皇に至り天皇自ら実施するようになる。とりわけ、天皇二首の歌で始まり天皇二首の歌で終わる『百人一首』の講釈は、王権の発露であり、臣下に対して君臣和楽を説く一環であったと思われる。そして、上皇から天皇への宮中の伝受は、帝王学であったと考えられ、本書は前掲拙著でも指摘した通り、内容が終始「王道」で集約されており、在位の君への伝受の性格が色濃い。

翻刻

【凡例】

漢字・仮名の別、仮名遣・傍書・割注・小字等は原文のままとしたが、通読の便を図るため以下のような処置を施している。

- 1 旧字・異体字はおおむね常用漢字に改めた。
- 2 最小限の読点・中黒を付した。
- 3 原文の当て字と思われるため意味が通じない箇所には、右傍に（マ）とした。
- 4 半丁の改丁を「」で表し丁数と表・裏を行間に「1オ」「1ウ」の如く略掲した。

【本文】

秋の田のかりほのいほの  
 師説をたつぬへしと侍るハ、天子の御うたには御めくみふかき事殊す  
 くれたる御うたなり、その故ハ民の春田かへすより心をつくしうへた  
 て、夏ハ水をたゝへ、秋は色つくまで生長の田面にしんらうをして、  
 かりほのいほにもりあかして、苦のし〇くにぬるゝ事、さても不便な  
 る態かなと、天子の御衣の袖につゆをおきたるとの慈悲の御うたなり、

\*さかい・しげゆき

埼玉大学教育機構非常勤講師

上句ハ民の事、下句ハ天子の御心と見侍る、王道の御めくみありかたき御製なり、秘と

かさゝきのわたせるハし」<sup>ト</sup>

是ハ月もなく晴たるやみの夜空なるへし、みちに心さす人ハ、かやうにうは玉のやみの夜までも、いたらぬかたなき心つかぬよくみるへしと也

我いほは都のたつみ

世をうちやまと人ハいへとも、といふへき哥也、人ハいへるにて我ハすみよきと云心ありて、ひとはいふなりととめたるおもしろし、人はうちといへとも、我はうからず、仏覚によく開悟してかちの心もちなり

花の色はうつりにけりな

をのゝ小町か女の身にて我顔のきのふよりけふハ四大日（つよひ）におとろへ行を、亡執のかたより」<sup>ト</sup>かなしく思ひて、歎たる歌也、花にいひていへとも、我ことを花といふ成へし、成へし、しかれハ是ハ煩惱なり、生死の大事をよく工夫して、真実の大事にたち入てさとり侍るハ、ほんなうより菩提にいたるところ生死即涅槃、善悪も二とわかつことなき中道の深理成へし

つくはねの嶺より

善ハ天下の徳となり、悪は天下の愁となる、つくはねの木の下たりもさせるひとつの木にもしつくハあらたなれとも、つもりくへてハ淵となりぬるとなり、小悪やまされは、成大悪と云教誡なり」<sup>ト</sup>

君かため春のゝにいてゝ

雪ハくるしみのかた也、みちをしろしめしぬる故ニ、春の野にいてゝわかなをつまれて、遍昭ニ給ひぬるハありかたき慈悲の御めくみなり、かやうにてこそ諸道のいさみとハなり侍へけれ、心ハ秋の田の御うたの心にかよひ侍るへし

あり明のつれなく

古今の中におもしろき歌ハいつれにて侍へき撰進せよと定家・家隆兩人にたつね仰られしに、この哥をいつれも勸進し侍るといへり、よく工夫せよとなり

久堅のひかりのとけき

やともかともいはてはねたる歌ハめつらしく」<sup>ト</sup>や、此歌為証歌、さていかにしてかくはねてくるしからぬそと思へとも、一首に味知（あじ）かた侍るましき哥也、口てん春の日にと下の五もしをよみきりて、などしつ心なくは花のちるらんとなどゝ云字を心によみ付て云入たる歌なるへし、深秘く

又説常に覽とはねぬるハ、うたかひたることゝ有、これはめにみていひつめたる故に、らんと云ともうたかはぬてにはハ成たるといへりあはれともいふへき人は

哀ともいふへき人とハ公界の人のこと也、人との為に善根と思へとも、白地凡夫のわきなれば、それもたゝすして、心は作善とおもへと、「なしぬるわさハみないたつらことになりて、うつるをいへるうた也、眼をつけてみよと也、口伝をよくきくへし

朝ほらけうちの川きり

四諦の法文ニ有門・空門・非有・非空門と云てあり、朝ほらけとハ此人界のわつかなる躰也、うちの川きりハ有為天変の世界のありさまなり、あらはれわたる網代は非有・非空の法性なり、心をつけて見るへし

きりくすなくや霜夜

情ハ新為先詞旧可用といふをしへ、此一首にこめて見え侍るうたなりと云と

世中はつねにもかもな

世中ハ何にたとへん朝ほらけのうたをおもへり、「世上のはかなき境界をうちくわんして、つねにもかなといへる成へし、あまの小船は不定の世界のあるしなり、船ハ空虚にしてたゞ人くの心のなすことくなる物なり、ありとやいはむなきとやいはん、今日をしらぬいのちのさかひはあまの小舟よりもはかなく見て、身のゆくゑをいへる心眼開たるうたなり、よく工夫すへし

おほけなくうき世のたみに

延喜のみかとの寒夜に御衣をぬかれたる例をおほして、一切の民までも法衣をおほはれけるとなり、かりそめの一反の念仏にもあまねく回向すれば、一滴万水にみちぬる也、少塵も大岳となることし、一切衆生又かれ」をあはれめハ、こなたを利すよくをおもふへきハ、此ことよりはり也、こゝを菩提心といふ

こぬ人をまつほのうら

(三行分空白)

かせそよくならのを川

此うた程ハよくきこえ侍り、三反吟し満れは身のけもよたつほど涼気もおほゆる哥也といへり、是最秘也、吟して見侍るに返すく心す、しくとなるうた也、禪定の心ならてハかくいひてもさとりかたし

人もおし人もうらめし」

王道の御うたにハあはれふかき御製也、人くのうへに善と云も悪といふも別にハ侍らず、みな心法のなすわさなれば、邪正弁へき方なし、さる所二人もうし人もうらめしとなり、畢竟無二無別なれハ、慈悲の御まなしりにハ一人を人もおしに、人もうらめしとも御らんせられぬる成へし、天照大神御歌ニ

慈悲のめににくしと思ふものそなきわろきをみれハ猶哀にて

王道ハ正直 慈悲 刑罰三をもちて三種神祇トせり、鏡を正直とし、神璽ヲ為慈悲、宝剣ヲ為刑罰、此三ツ備リテ為肝心、此歌よく相叶へり、此説紙墨ニ不載之、可秘く

百敷やふるき軒端の忍ふにも」

是も王道のうつりもてゆく所、天智天皇の御うたの我衣手にとあそはしたるニ、はや時代うつりかはりてかやうに其代をも今ハ忍むかしになりたるをよく見よと也、一日ノ内ニモ成住壞空トテ四劫アリ、則王相死因老ナリ、寅卯辰ハ成劫、巳午未ハ住劫ナリ、申酉戌ハ壞劫ナリ、亥子丑ハ空劫ナリ、是輪ノ上ニモアリ、天子の御上ニモ御一世にも勿論ナリ、勿論天照大神ヨリ百王をさして、四劫も有へし、これらをよ

く分別する所みちの肝心たるへしと也」<sup>五ッ</sup>

詠歌大概口伝切紙 三通

心ハ新 詞旧

心ハ直 詞艶

たとへハ心はあたらしくといふニ、一の心を出したり、むかしより人のよみならはさぬうたをあたらしくよみ出したる作意とまた古くよみたる歌をすこし引かへて、心をあたらしくなす二のやう也、こと葉ハふるく同艶にといへるも、あたらしきことをよまんとする故に、こと葉のあしくなり行をもつて旧きこと葉のほかにはいましましたり、又心直くとあるにこと葉の艶にといへるハ、こゝろのなをきうたハまた必俗にちかくなりゆく故也、尤くてん也、<sup>六オ</sup>「秘中の深密たるへし一きりくすなくや霜夜のうた、心ハ新詞旧証例よく思ひ知へし、此歌の義理ハ百人一首ニアリ、返と情ハ新旧詞をもつて作たる歌、これらを先とし侍るへき也

三十六人集之内殊上手歌可懸心

三十六人の内二人丸・貫之・忠岑・伊勢・小町等也、類といへる類ト云字にていまたあるへしと意得へき也、業平・遍昭などやうの人なるへし、是も口伝のゆへ師説をうくへしとハ此口伝なり」<sup>六ッ</sup>

未来記口伝

前和歌得業生柿本貫躬

是ハ儒者の家ニ成付たる官たるを、和歌の家になること是非分なり又柿本の氏ハ人丸名人たりといへとも、氏ハかりにハきとくなし、貫之の貫と躬恒ノ躬とをとりて、貫躬といへる、三人の名人の名をとりても、更無詮、未来記のうたの心かくのことし、いかによき詞をとりても、一首の吟くたり侍らず、心すみ侍ら<sup>七オ</sup>「ねハ、たゞ柿本の貫躬とつける名のりによく相当したる歌なるへし、是此五十首の口伝の深秘なり

(八行分空白)<sup>七ッ</sup>